

地球環境部門—研究協議会

人新世時代における気候変動への建築・都市・地域の応答

[資料あり]

9月13日(水) 9:00~12:30 法経済学部本館 第7教室

司会 横尾昇剛(宇都宮大学)
副司会 宮崎慎也(福岡大学)
記録 廣谷純子(名古屋女子大学)

1.主旨説明 糸長浩司(エコロジー・アーキスケープ)

2.主題解説

①気候変動における生き

物と人の関係の再構築は可能か

山極壽一(総合地球環境学研究所)

②人新世の議論における「惑星」の概念について

:世界の定まらなさで生きることの条件をめぐって

篠原雅武(京都大学)

③IPCC 第6次報告における建築・都市の責務

下田吉之(大阪大学)

④デザインできない世界と付き合う覚悟

岡部明子(東京大学)

⑤建築学に求められること

外岡 豊(埼玉大学名誉教授)

3.討論 コーディネーター:高口洋人(早稲田大学)

コメント:能作文徳(東京都立大学)・糸長浩司(前掲)

・山極壽一(前掲)・篠原雅武(前掲)・下田吉之(前掲)・外岡 豊(前掲)

4.まとめ 中村 勉(ものづくり大学名誉教授)

地球環境委員会脱炭素社会ワーキンググループは、2021年2月の公開研究会「人類非常事態／新型コロナ・気候非常事態に応答し脱炭素社会に向けて」、9月の大会パネルディスカッション「人類非常事態への応答 PART2」の開催を通じ、地球環境異変に対して、哲学・環境学・国際学・建築学の総合的叡智による問題認識と解決に向けた課題を探ってきた。IPCC や IPBES の最新報告や世界中の異常気象災害に見られるように、深刻な地球環境事態はさらに進む。この破滅ともいえる人新世の途から離脱に向けた社会経済空間の変革が

急がれる。

人間と地球・生態系・生物との関係性をどう修復・改変するか、西洋モダニティによる人間開発システムが地球生態系を壊し、その結果として人も人以外のものも破滅的近未来が予想され、「人類絶滅学」、「崩壊学」も提起されている。その要因にアーバニズムがあり、それを支えてきた建築学、建築界にも大きな変革が求められる。地球温暖化への緩和と適応の緊急性がある中で、異常なスクラップアンド型の大規模都市再開発による CO2 排出が加速主義に賭けるがごとく加速する。人類は人間以外のものとともに生き続けるために、どうそれらのものとの関係性を再構築したらよいのか、異常気象への緩和策と災害への適応策の短期・中期・長期のシナリオをどう築くのか、人間が生き残るための脱開発型アーバニズムの可能性、それに寄与する建築の在り方、ライフスタイル、新たな居住理念が問われている。建築外の分野の叡智との交流により、この大きく根本的な問いを皆で考え、より良い変革の途を探りたい。